

大人向け雑誌における「女子高生」の性的商品化と思春期女子の性行動の変化に関する研究

（分担研究：メディア情報が女性の健康に及ぼす影響に関する研究）

分担研究報告書

分担研究者	村松泰子 ¹⁾
研究協力者	佐藤（佐久間）りか ²⁾
	苔米地伸 ³⁾
	平野亜矢 ⁴⁾
	岡井崇之 ⁵⁾

研究要旨

近年、思春期女子の性行動の活発化が問題視されているが、その背景には社会的に未成熟な少女を性対象として選ぶ年長男性の存在がある。本研究ではまず、そうした年長男性が少女に対して取る社会行動の実態を探るべく、首都圏の街頭において制服を着ている中高生女子 121 人に質問紙調査を行い、年長男性からの「援助交際」などへの勧誘の経験について聞いた。その結果、回答者の 4 人に 3 人が、25 歳以上の男性に街で誘いの声をかけられた経験を持ち、およそ 2 人に 1 人が自分の父親と同じくらいかそれ以上の年齢の男性に声をかけられていることがわかった。しかも、声をかけられたうちの約 6 割が代償として金品の供与を持ちかけられていた。従来はテレクラ、伝言ダイヤルなどの電話媒体が、年長男性と思春期女子の接触をもたらすものとして注目されて来たが、今回の調査では、ただ制服を着て街を歩いているだけで少女が大人の男性から誘いの声をかけられるようになっている実態が明らかになった。さらに、こうした年長男性の行動とメディア情報の間にどのような関係があるかを探るために、大人向け雑誌における「女子高生」関連記事の分析を行なったところ、ブルセラ・ショップが話題を呼んだ 93 年以降、思春期の少女を性的商品として扱うような記事が急速に増加し、特に 96 年には「女子高生」を「援助交際」という語に結びつける傾向が顕著になったことがわかった。マスコミを介した「援助交際」という語の普及は、年長男性が少女に接触を図る際の心理的バリアを低くする機能を果たしている可能性があり、今後、より綿密な内容分析を行なって問題を掘り下げていく必要があると思われる。

研究目的

女子高生ブームといわれる中で、制服を着ている少女たちの性的商品化が進行している。90 年代に入って高校 3 年女子の性体験率が急速に伸び、同年齢の男子のそれを超えたことが複数の調査から明らかになっている。¹⁻² 思春期男子の性体験率に近年それほど顕著な変化が見られないことを考えると、思春期女子の性行動の活発化は、彼女たちを性対象として選ぶ年長男性の存在を

1) 東京学芸大学教育学部

2) プリンストン大学大学院社会学科

3) 上智大学大学院文学研究科社会学専攻

4) 上智大学文学部新聞学科

5) 東京大学社会情報研究所

無視しては説明できない。少女たちの性行動の変化は、しばしばメディア情報の悪影響や親・学校教育の失敗などによる少女たちの性道徳の崩壊といった文脈で語られるが、高校女子を対象としたグループインタビュー（平成9年度心身障害研究）でも、「変わったのはおじさんたちの方」という意見が出ており、少女たち自身の行動分析より、むしろ少女を取り巻く社会環境、特に成人男性の少女たちに対する行動パターンも検討する必要が高まっている。³

したがって本研究は全体を二部構成とし、第一部では女子中高生を対象とした街頭質問紙調査を通じて、年長男性と「制服少女」たちの社会的相互作用の実態を探り、第二部では、「女子高生」を中心とした思春期女子に関連した記事を、90年代の主要な大人向け雑誌から抽出し、記事タイトルならびにリードの分析を通して、少女たちの性的商品化がどのように進化したかを検討する。

<第一部> 「制服少女」街頭質問紙調査

研究方法

1. 調査方法

新宿と町田の街頭において、制服姿の少女たちに調査目的を説明して協力を求め、承諾を得られた121名に対し、質問紙を用いて対面調査（さらに承諾を得られたものについては発言を録音）を行った。調査日時は新宿が98年10月30日（金）午後1～6時、町田が10月31日（土）午後1～6時。調査場所の選定については、渋谷のセンター街・109前、新宿のアルタ前・コマ劇場前など、援助交際の拠点としてマスコミなどに取り上げられている場所を敢えて避け、都心と郊外の比較ができるように、新宿駅南口周辺と町田駅周辺を選んだ。新宿については南口ルミネ前広場および西口連絡通路のモザイク広場周辺、町田については小田急百貨店裏のマクドナルド周辺、JR町田駅前広場、さらに小田急町田駅北口広場で調査を行った。

2. 調査内容

フェース・シート（9項目） 制服とそのイメージに関する項目（15項目） 街中での年長男性との接触体験に関する項目（年齢層別各16項目および一般論8項目） 女子高生ブームに関する項目（19項目）など、全83項目。

3. 調査対象

制服（または制服風の服）を着た少女121名（うち新宿64名、町田57名）（表1～3を参照）回答者の平均年齢16.34歳。学年別では中学生が14.9%、高校1年28.1%、高校2年28.9%、高校3年28.1%。学校のタイプでは私立が74%で公立を上回り、共学が56%で若干女子校を上回る結果になった。居住地別では東京が全体の60%（うち27%が23区内）、神奈川がそれに次いで多く30%となった。その他も埼玉・千葉など首都圏を居住地とするものであった。回答者の60%が調査地（新宿あるいは町田）を通学路としていた。

調査地点による違いを見てみると、新宿では高校2～3年が全体の6割強を占めているのに対し、町田では約5割とやや少ないが、平均年齢では新宿16.31歳、町田16.37歳とほとんど差はない（T検定で有意差は検出されなかった）。新宿では私立女子校、町田では公立共学校の生徒が多い。また新宿では都内在住者が7割で、あとは神奈川・千葉・埼玉など各地から集まっていたが、町田では神奈川県、東京都下、23区と続き、他県在住者はみられなかった。調査地を通学路としている者は町田では全体の約3分の2、新宿では約半分強とやはり町田の方が多かったが、町田は東京南西郊外では鉄道の交差する拠点都市であるためか、通学路をわざわざはずれて訪れた中高生も思いの外多かった。

4. 参考調査

時代の変化を探るために、今回調査に協力してくれた少女たちに、母親に同様の質問紙を渡してもらうように依頼した。拒否された場合を除き約80通ほどを手渡し、郵送にて27通を回収した。母親向けの調査内容は、フェース・シート7項目、制服とそのイメージについて3項目、

街中での年長男性との接触体験に関する 10 項目、女子高生ブームについて 14 項目の、全 34 項目。回答者 27 名の平均年齢は 45.8 歳で、96.3%が制服を着用した経験を持っていた。つまり、約 30 年前に中学・高校時代（すなわち制服時代）を過ごした世代である。数が少ないので単純比較はできないものの、今日の状態をある程度相対化するのに役立つものと思われる。

研究結果

1. 制服とそのイメージについて

ここでは少女たちに制服に対するイメージについて質問した。本調査では「制服（または制服風の服）を着ている」少女たちに、調査協力を依頼した。「制服風の服」を含めたのは、公立校などで制服がない学校の場合でも、襟付きのシャツとスカートというように標準服を定めているところがあり、しかも 80 年代末より一部私立校に有名デザイナーによる制服が導入されたことから、女子生徒の間で制服ブームが起こり、制服規定のない学校の生徒もカーディガン、白ワイシャツ、リボン、チェックのミニスカート、ルーズソックスと、一見制服のように見えるファッションを身につけることが多くなっているために、本当の制服とそうでないものが、見かけだけでは判断がつかないからである。

制服に対する本人の意識

今回の調査では、制服と思しき服を着ていた回答者の約 15%が、本当の制服ではなく「制服風」の服であった（表 4）。上述したように制服がない学校で、それらしい服装をしているという者もいたが、学校を出てから、正規の制服の一部（スカート、セーター、ルーズソックス）を着替えたという者もいた。

通学や学校関連行事以外のときにもその制服（または制服風の服）を着ると答えたのは全体の約 3 割である（表 5）。どうして制服や制服風の服を通学以外でも着るのかを、自由回答（以下自由回答で得られた中高生の言葉は に入れて表示する）で聞いたところ、（自分の）高校は私服だけど、女子高生だから制服を着たい 女子高生で今しか着れない、女子高生ってブランドみたいなものだから うちの制服はけっこう自慢だから など、「制服」そのものへの思い入れが多く聞かれた。その一方で、制服だと年齢が分かって男の子が声をかけやすい 友達と一緒に出かけるときに（互いの雰囲気）合わないと思うと困る といった実用的な意味合いもあることがわかった。他校の文化祭を訪れる際には必ず着る と答えた子も複数いた。

自分の学校ではない学校の制服で着てみたいのはどこか、という質問には、42 名（全体の 34.7%）が具体的な学校名を挙げて答えたほか、さらに 23 名（19.0%）が プレザーが着てみたい セーラー服が着てみたい チェックのスカートがはいてみたい など具体的なデザインを挙げた。実際に「セーラー服」が着たいから他校の生徒から借りる と答えた例もあった。もっとも人気が高かったのは品川女子高校の制服（11 人）、ついで渋谷女子高校の制服（8 人）であり、その理由は圧倒的に かわいいから が多かったが、中には マスコミや男の子に人気があるから というものもあった。制服自体がかなりブランド化していることがよく分かる。

「高校を卒業して制服を着なくなったらどう感じると思うか」という質問に対しては、61.1%が「淋しい」という選択肢を選んだ（表 6）。逆に「嬉しい」と感じるというのは 8.3%しかいない。これが 30 年前の高校生だったら、どうであろうか。参考までに、母親世代の回答を見てみると、「嬉しかった」が 23.1%、「淋しかった」が 11.5%で、「別に何とも思わない」が 57.7%だった。これは「実際に制服を着なくなってどう思ったか」という質問で、将来のこととして質問された娘たちの回答と単純には比較できないが、制服に対する思い入れが、現在の女子中高生では非常に強くなっているということは言えるのではなかろうか。

制服に向けられる他人の視線

「制服を着ているときと着ていないときで男性の視線に違いを感じるか」という質問には、58.7%が「感じる」と答えている（表 7）。制服のときは オヤジがエロい目で見てくる 足をよく見られる なめるように見られる 声かけられやすい と答える少女が多かった。「大人の

男性は制服に対してどんなイメージを抱いていると思うか」という質問に対しては、バカそう 遊んでる だらしない 援助交際 コギャル といったネガティブなステレオタイプが一番多く、エッチ いやらしい エロい という男性の視線そのものに関する回答がそれに続き、次いで 若い かわいい 清純 というポジティブなステレオタイプが挙げられた。女子高生って(いう)フェロモンが出ているような... おじさんにはセーラー服はたまらないんじゃないか、特に灰色は人気があるらしい 看護婦とか制服フェチに興味ある人はいる ロリコン マニアック、制服ってだけで上から下まで見られるし、写真撮られる など、はっきり制服のエロス化を認識して言葉にする少女もいた。これに対し、同世代の男子が制服をどう見ていると思うかについては、特別なイメージは持ってない というのが大多数で、かわいい というのがそれに続き、同世代ということで親しみを持つ という声も多い。いやらしい、エッチ な視線を指摘したのは2人だけだった。

最後にテレビやアニメなどで制服を着ているキャラクターとして思い浮かぶものを挙げてもらったところ、51人が『セーラー・ムーン』を挙げた。さらにドラマ『プライベート・アクトレス』の榎本加奈子(15人)、『神様もう少しだけ』の深田恭子(9人)がそれに続いた。

ちなみに調査地点別の差を見ると、当人の制服に対する意識の面では新宿と町田で大きな差はないが、「制服を着ているときに男性の視線に違いを感じるか」という問いでは、新宿では約3分の2が感じると答えており、町田の約半数に比べるとやや多いように思われる(二乗検定による有意確率は0.079)。

2. 年長男性との街中における接触体験について

オジサンに声をかけられたことがあるか

平成9年度の厚生省心身障害研究で女子高校生にグループインタビューを行なった際、実際に街中で「オジサン」に声をかけられることが多い、ということが発言の中に繰り返し登場したため、「オジサン」というのは何歳くらいを指すか、と聞いたところ、大学生については自分たちとほぼ対等な関係と見ているらしく、「20代後半くらいから上」という回答が得られた。³「社会人」という表現では10代の勤労青年も入ってしまうが、本調査では、従来はあまりなかった、年長男性と女子中高生の街中での接触に注目したいので、便宜的に「25歳以上の男性」を「オジサン」と定義して、さらにそれを回答者の父親の年齢より「若い」か、あるいは「同じかそれ以上」で「若めのオジサン」と「中年のオジサン」に階層化して差異をみることにした。今回の調査では、父親の平均年齢は47.3歳であるので、大体20代後半から40代前半までが「若めのオジサン」、そして40代後半以降が「中年のオジサン」ということになる。

まず、それぞれの年齢層の男性に「街で声をかけられた(ナンパされた)経験はありますか?」と質問したところ、回答者のうちおよそ4人に3人までが、少なくとも一度は25歳以上の男性に何らかの誘いを受けたことがあることが分かった(表8~10)。男性の年齢層別に見ると、少なくとも1度は「若めのオジサンに声をかけられた経験がある」のが68.6%、「中年のオジサンに声をかけられた経験がある」のが47.1%であった。

副都心である新宿と郊外都市の町田で、年長男性から声をかけられた経験に差が出るかどうか、が一つの注目点であったが、男性のいずれの年齢層でも有意な差は検出されなかった(二乗検定による有意確率は「若め」で0.666、「中年」では0.298)。また、回答者の学年によって、つまり制服生活が長い方が声をかけられた経験を持つ者が多くなるのではないかと、という予想があったが、そのような直線的な相関関係は見られなかった。初めて声をかけられたのはいつだったか、という質問に対する答えを見ると、もっとも度数が多いのは「若めのオジサン」「中年のオジサン」ともに高校1年のときだが、回答者の半数以上が中学3年の終りまでに「25歳以上の男性」からの誘いの洗礼を受けていた(表11)。

オジサンになんと言って声をかけられたか

次に「なんと言って声をかけられたか(複数回答)」という問いに対しては、「カラオケに誘われた」というのが「若め」で32.5%、「中年」で39.3%ともっとも多く、次いで「ただ声をかけられただけ」「お茶に誘われた」と続く(表12)。いきなり「ホテルに誘われた」という例も、相

手が「若め」の場合で2人(2.4%)、「中年」では4人(7.1%)いた。「それ以外のことを求められた」というのは、ほとんどが「遊ぼう 遊ばない?」といった抽象的なことをいわれたケースだが、一緒にプリクラ取ろう お金あげるから雑誌のモデルやらない? PHSの番号を覚えて といった怪しげなものから、Hな話しよう 援助交際しない? お金あげるからオナニー見てて などと極めて露骨なものまで、いろいろあるようだ。最近はプルセラは下火になっていると言われるが、制服売って 靴下欲しい 髪の毛頂戴 といった申し出は、数は多くはないものの、依然としてなくなってはいない。援助交際しない? お小遣い稼がない? といった表現をするのは「若め」より「中年」に多い。

一度でもオジサンに声をかけられた経験を持つ回答者の6割弱が、「お金をあげるから」あるいは「何か買ってあげる」などと、現金あるいは物品の供与を代償として持ちかけられた経験を持っている(表13-1)。男性の年齢層で比べてみると、「中年」では66.7%、「若め」では46.3%と、やはり年長者の方が金品供与をもちかけるケースが多いようだ。具体的な金額の提示がないケースがもっとも多い(「若め」44.1%、「中年」37.1%)が、具体的に金額を提示する場合は、「1万円以上5万円未満」が、相手が「若め」の場合で32.4%、「中年」で37.1%となっており、このあたりが相場になっているようだ(表13-2)。具体的な例としては5万で写真撮らせて、あっちのビルで1万円30分でどう? 1時間1万円でおじさんと付き合わないか 1回5000円パンチラしない? 月に10でも20でもいい(おそらく単位は万円)などが挙げられた。中には「今飲んでる缶ジュースを売って」と言いながら財布から1万円札を何枚か出してちらつかせた あるいは 携帯の画面に「3マンエンドウ?」と送られてきた といったケースもあった。現金ではなく、「何か物を買ってあげる」というケースは「中年」男性より「若め」男性に多いようだ。具体的な商品名が挙がったのは ヴィトンのバッグ(7万円相当) グッチの時計 服、ブランド品 など。

いつどこでどのように声をかけられるか

声をかけられたときの状況(複数回答)について聞いたところ、「若め」「中年」どちらの場合も、「1人だった」ときに声をかけられているケースがもっとも多いが、約4割が「2人だった」ときにも声をかけられている(表14)。少女たち自身が複数のときのほうが、警戒心が弱まるということを、男性側も分かっているのだろう。一方、男性の側は圧倒的に1人であることが多い(「若め」88.8%、「中年」94.6%)が、「若め」の男性の場合は自分たちも2人組で、2人組の少女に声をかけることも少なくないようだ(表15)。本人の服装でみると、制服を着ているときの方が私服のときよりも声をかけられやすいようだ(表16)。

声をかけられたのがどこだったか、具体的な場所を自由回答で挙げてもらったが、街ではやはり調査地である新宿と町田が多く、渋谷がそれに続いた。特定の場所としては、やはり渋谷はセンター街と109、新宿は歌舞伎町 コマ劇場周辺 アルタ前 が多かった。他には池袋 サンシャイン通り が複数の回答者から挙げられた。家の近く 地元 近所 という回答もかなり多かった。声をかけられたときの時間帯を見てみると、もっとも頻度が高いのが午後5~9時の間で(相手が「若め」のオジサンでは63.4%「中年」で56.4%)、必ずしも夜遅くまで遊んでいるから声をかけられる、というわけではないことが分かる(表17)。

初めて声をかけられたときはどう反応したか

まず、初めて声をかけられたときの本人の気持ちについて、選択肢を用意して質問した(複数回答可、表18)。もっとも多かった答えが「気持ち悪かった」である。相手が「若め」でも「中年」でも、声をかけられたうちの6~7割が「気持ち悪かった」と答えている。次いで「こわかった」「危ないと思った」「腹がたった」などが続いている。相手が若い場合は「面白かった」「ラッキーと思った」などのポジティブな反応も見られた。相手のことをどう思ったか、についても同様に選択肢を設けて質問したが、「バカみたい」が一番多く、次いで「いやらしい」が多かった(表19)。「その他」の自由回答では 気持ち悪い の他に ウザイ という表現が非常に頻繁に登場した。勝手に値段つけるなよ このおじさんについていく人はどういう人だろう、ついていく人の気持ちはわからない 声かける人って意外に普通なんだな、と思った といった感想が

あった。ビックリした という回答のなかには、普通のナンパだと思っていたのに、「お金をあげる」といわれて初めて「援助交際」の誘いをかけられていると知って驚いた、というケースもあった。知人の体験談に関する質問への回答のなかで、25歳以上の男性に街で声をかけられて、その後恋人として付き合っている友人がいるという回答が複数あり、相手が大人の男性でも、明らかに妻子持ちであるような年齢でない場合は、声をかけられたときに、少女たちの側は必ずしも「援助交際」の関係だけを想像するわけではないようだ。

実際に声をかけられてどうしたか、ということを選択肢で聞いたが、「黙って無視した」が一番多く（「若め」で42.7%、「中年」で51.8%）、次いで「話を聞かずに断った」「その場で話を聞いた上で断った」と続く（表20）。「納得できる範囲でつきあってあげた」という選択肢を選んだのは、声をかけられたことのある子のうちの2.4%（若め）1.8%（中年）と極めて少数だった。「つきあってあげた」というのが必ずしも一般にいう「援助交際」を指すものとは限らないが、97年9月に『サンデー毎日』編集部が渋谷八公前広場で行なった女子高生100人アンケートでは、16人が援助交際の経験があると答えていたのと比べると非常に低い数字である。⁴本調査の回答者がどこまで正直に答えているかはわからないものの、渋谷あたりで特に目立つ女子高生を対象としたマスコミの調査と違って、一般的な女子中高生の実態というのはこの程度のものではないかと思われる。「その他」の内訳では「すぐ逃げた」というのが一番多かった。

今同じように声をかけられたらどう反応するか

初めて声をかけられたときには6~7割が「気持ち悪かった」と答えていたが、「今同じように声をかけられたら？」と聞くと、「気持ち悪い」と答える率が5割以下に下がった（表21）。「こわかった」「危ないと思った」という反応も、初めてのときに比べるとおよそ半分かそれ以下に減少している。一方、初めてのときには「腹が立った」という回答は2割以下だったが、今だったら「腹が立つ」だろうと答える率は「若め」で22.0%、「中年」では30.4%とかなり高くなった。「何とも思わない」という回答もそれぞれの年齢層で倍増した。またかつて感じ「当たり前だから」という回答にみられるように、声をかけられることに慣れてきて不安感が薄まり、逆に「世の中そういうものだ」とタカをくくようになってきている。

「今だったらどう対応するか？」という問いに対しては、「黙って無視する」「すぐに断る」という回答が増加し、「その場で話を聞いた上で断る」という回答は減少している（表22）。話なんか聞かなくても、もうどういうことか分かっている、ということであろうが、この減少の割合は「中年」オジサン相手の場合が大きい。つまり、相手が自分たちの年齢に近い「若めのオジサン」だったら、普通のナンパである可能性もあり、すぐに断る必要はない、ということだろう。また、少数派ではあるが、少し迷うと思う「お茶ぐらいなら金出せば お金ないから、友達と一緒にならいい ドライブだけなら 見た目が良くて若ければOKするかも」といった回答もあった。一人だけが「警察に連れて行く」と答えた子もいた。

オジサン相手に怖い目にあったことはあるか

これまでに「無視した」「断った」あるいは「つきあってあげた」ために怖い目にあったことはあるか、という問いに「ある」と答えたのは、声をかけられたことのあるうちの、およそ4人に1人だった（表23）。具体的には、いくら断ってもずっと後をつけてこられた おっかけられた 腕を引っ張られた などが回答の約3分の2を占めるが、中には かばんとられた 一週間ずっと駅で待ち伏せされた 車につれ込まれそうになった なぐられそうになった 頭つかまれて交通標識のポールにぶつけられた、さらには カラオケにつきあった後ホテルに行こうと誘われ、断ったら事務所みたいなところへ行こうと脅された といったかなり危ない体験もあった。

オジサンに声をかけられたことについて親に話すか

また、年長の男性（オジサン）に声をかけられたことを親に話すか、という問いに対しては、「父親にも母親にも話さない」というのが過半数を占めた（表24）。特に中年男性から声をかけられた場合は話さない傾向が強い（66.7%）。これはおそらくいわゆるナンパではなく、「援助交

際」を持ちかけられたということなので、話すのに抵抗感が強いのかもしれない。次いで「母親だけに話した」という回答が続き、父親にも（あるいは父親のみに）話すというのは、少数派であった。親に言わない理由として多く挙げられたのは、単に 心配かけたくない たいしたことじゃない というものが多いが、そんな格好で歩くから悪いといわれる うるさくいわれるから など自由を奪われたり、自分が責められたりすることを懸念して話さないケースも少なくない。話したときの親の反応としては、心配してくれた 危ないから注意して といったものももっとも多いが、遊んでるからよ あんたが軽そうだからじゃないの 制服着るのやめなさい など、やはり本人を責める発言をした例がいくつか見られた。援助交際するような子に見られるんだって、あきれてため息ついてました という回答もあった。

友達はどんな経験をしているか

さらに、本人の年長男性に声をかけられた経験のあるなしにかかわらず、「友人にそういう体験をしたことがある人は何人くらいいると思うか」と聞いたところ、全体の 59.5%が「3人以上」と答えた（表 25）。但し、本人が一度も声をかけられたことがない子の場合、声をかけられた友人が「3人以上」いるのは 26.7%に留まり、「1人もいない」と答えたのも 26.7%だった。やはり同一の友達サークルでは遊びに行く場所も共通であることから、自分が声をかけられている子は回りにもそういう友達が多いのだろう。友達から聞いた話で印象に残った体験談について聞いたところ、具体的な例を挙げた 80 人のうち声をかけて来た相手の誘いに応じた話を挙げたのは 20人で、そのうちの約 3 分の 1 がキス、オーラルセックス、セックス、自分の身体を触れさせる、相手のマスターベーションを見るといった性的な行為を伴うものだった。中には 女の子を家に呼んで「いくらあげるから触らせて」と、身体の部位を指定して、その都度値段交渉をするオジサンを、仲間みんなで引っかけて最後までやらせずにお小遣いをもらっている という知人の話をして、うらやましいけど（自分は）やりたくない という子もいた。カラオケして楽しかった。お金を 1 万円くらいくれた 一緒に遊びに行って 10 万もらった といった、性的行為を伴わずにお小遣いをもらったり、食事をおごってもらったりしたウマイ話もある一方で、本人は性行為をするつもりがないのに、車に乗ったりホテルについて行ったりして性交を強要されたという例が 2 件あった。さらに、政治家と援交。カラオケ行ってお金もらった。携帯も買ってもらった。数人いたところ待っていた子にも 1 万円くれた という友人の話をして、1 万円はいいがやっぱり危ない と思ったと言い、（政治家が援交するなんて）日本はこんなんでいいの不安になった と語った少女もいた。こうしたウマイ話やセンセーショナルな話は単なる噂話であることが多いが、今回の調査ではほとんどが自分の直接の友達が体験したこととして語られていた。

オジサンはなぜ声をかけるのか

「こうしたオジサンはどうして中学生や高校生の女の子に声をかけるのだと思うか」という質問に対する自由回答では、若いから とする答えが非常に多かったが、その中でも年長男性が少女たちの未熟さにつけ込んでいる（若いからひっかかりやすい 自分より弱い）という見方と、年長男性が若さそのものを求めている（若くてピチピチしている身体が目的 若い人に憧れがある）という見方の二通りがあった。中には 35 歳くらいの友人の父親はアニメおたく。最近のオヤジにはロリコンが多い。マスコミの影響かもしれない と分析している子もいる。またオジサンは 人に相手にされず寂しいから とみる意見も多い。特に 奥さんに相手にされない 娘に無視されてる など、家族関係に問題を見出している。また、オジサンが特に女子高生を誘うのは、女子高生は 金がないから お金に困っているから お金が欲しい年代だから など、彼女たちの金銭欲の強さを当然視したような意見も多かった。一方、スカートが短いので誘惑される 高校生もそういうことしそうな格好しているからしょうがない 今の高校生は軽く見られている と、声をかけられる側の責任を挙げる者も少数派ながらいた。ちなみに、「街中や電車のなかで痴漢に遭ったことがあるか」という質問では、少なくとも一度は「ある」と答えた 95 人のうち、79 人（83.2%）が「制服（あるいは制服風の服）の方が痴漢に遭いやすい」と答えている（表 26）。

母親世代との比較

これはあくまでも参考だが、母親の世代が中高生だった頃（平均年齢 45.8 歳なので、30 年近く前）に、オジサンに声をかけられたことがあるか質問しているので、比較してみよう。母親世代では 25 歳以上の男性に一度でも声をかけられたことがあるのが 18.5%（27 人中 5 人）で、娘世代の 75.2%とは大きな違いだ。母親世代では地方在住だった人が 7 人いるので、それを除外して東京・神奈川・千葉・埼玉在住だった人に限っても 20.0%にしかならない。当時はカラオケはなかったから、声をかけるパターンとしては「お茶に誘われた」というのがもっとも多く、「金品の供与」を持ちかけられたのは 5 人のうち 1 人しかいなかった。また制服着用時に誘われたことがある、というのも 1 人だけだった。

3. 女子高生ブームについて

マスコミに描かれる「女子中高生」のイメージをどう思うか

「コギャル」「ポケベル」「援助交際」「テレクラ」などマスコミで報道される「女子中高生」のイメージをどう思うか、4 つの選択肢から選んでもらったところ、78.5%が「一部にはそういう人もいるが、そうでない人の方が多いと思う」と答えた（表 27）。次いで「実際そのような人が多いと思う」（14.9%）「そのような人はほとんどいないと思う」（5.0%）「その他」（1.7%）となった。「その他」のなかには「見た目と中身は違う 援助交際とかテレクラは一部の人で、ポケベルは普通に持っている 渋谷とかには多い。マスコミはそういう所を狙っていく」といった答えがあった。

具体的にマスコミが作り出す「女子中高生」イメージの嫌なところについて聞いたところ、全部がそうだという感じで報道されるのが嫌 という意見が圧倒的に多く、その中でも特に「みんなが援助交際していると思っているところ」を強調する回答が 20 人から寄せられた。「女子高生=援助交際」というステレオタイプのせいで「スカート短いだけでそう思われる 声をかけてくる人が多い 自分の親にまで「やってんじゃないの」といわれる など、強い反発を見せている。「ベル・PHS・ルーズ」はもはや女子高生としては普通で、「ピアス、メッシュ」なども単なるファッションなのに、そうした「外見だけで不良と思われる」のは心外だ、というわけだ。しかしその一方で、少数派ながら「周りや街中の女子高生を見てそのとおりだと思う 道に座ってパンツ見せてる人はダメだと思う 遊んでるのも本当だし、しょうがない」といった意見も見られた。

援助交際とはなにか

身内ではない男性とのつきあい方について、「相手の年齢」「金品の授受」「性的行為の有無」の 3 つの軸をたてて、どういう場合を「援助交際」だと思うかを質問した（表 28）。その結果、援助交際かどうかを判断する際のもっとも重要な軸は、「金品の授受」であり、次いで「性的行為の有無」、そして「相手の年齢」はもっとも弱い要因であることが見えて来た。つまり、「現金の授受」がある場合、相手がずっと年上であろうと同年代であろうと、また、そのつきあいが「セックスやそれに近い行為をすること」であろうと「お茶や食事、カラオケなどにつきあう」程度のものでであろうと、回答者の 7 割以上がそれを「援助交際」だと考える。一方、「金品の授受」がまったくない場合、たとえ相手がずっと年上で「セックスやそれに近い行為」を伴う関係だったとしても、それを「援助交際」とみなすものは、3 割以下になる。但し、これが現金ではなく、「服やバッグ」などの物品であった場合は、相手の年齢が近くて、性的な行為を伴わなければ、「援助交際」と見なす率は 6 割弱だが、相手がずっと年上だったら 8 割となる。

この質問については、母親世代と娘世代の感覚のズレが興味深い。「金品の授受」が最も重要な決め手であることは娘世代と共通しているが、母親世代ではバッグや服などの物品もほとんど現金と同じに見なされる。さらに、「性的な行為を伴うかどうか」はほとんど「援助交際」かどうかを区別する際の決め手にならない。つまり、セックスをする場合でも食事をする場合でも金品の授受があれば、85%以上がそれを「援助交際」と見なすのである。また娘世代ではほとんどが「ただのナンパ」と捉えている、金品の授受なしの、同年代の男性との食事やカラオケでも、母親世代の約 4 割は「援助交際」とみなしているところに大きな世代間ギャップが見出せる。

しかし、世代間ギャップはあくまでも一般的な傾向において見出せるものであって、何を「援助交際」と考えるか、ということはかなり個人個人の差があるといえよう。たとえば、娘世代でも「ずっと年上の男性にお金をもらってセックスやそれに近い行為をすること」は援助交際ではない、とした回答者が1名いたが、彼女の場合こういう行為は お仕事 である、つまり援助交際とは別の売春という 仕事 だ、という理解があるのである。逆に「ずっと年上の男性と金品をもらわずにお茶や食事・カラオケなどにつきあうこと」を「援助交際」と見なす者が22.3%いる、というのも、彼女たちが「援助」の意味を、年長男性からの金銭的援助ではなく、女子高生の側からオジサンに対する精神的援助と捉えているからなのかもしれない。

女子高生ブームのなかの自分をどう見るか

まず、女子高生ブームが今も続いていると思うかどうかを質問したところ、51.1%が「もう下火だと思う」と答えており、その多くがピークは97年だったと答えている(表29)。「今も続いている」と答えたのは35.5%、「もう終わっている」が9.1%であった。また、「女子高生ブーム」というのは自分にとって良いことか悪いことか、という質問に対しては「どちらでもない」というのが過半数(53.8%)を占め、次いで「悪いこと」(23.1%)「良いこと」(19.0%)と続く(表30)。「悪いこと」の理由はほぼ全員が色眼鏡で見られること(普通にしてる子もコギャルのイメージで見られる みんな同じに見られる)を挙げたが、「良いこと」の方はもう少しバラエティがあり、チャホヤされるのは嬉しい おじさんとかがなんとなく優しくしてくれる おまけしてくれる やっぱ頂点になった気分だから みんながおしゃれになっている 高校生の雑誌とかがいっぱい出て、友人が出たりして楽しかったから 女子高生である優越感がある 私たちの歳が中心、注目されている などがあつた。

最後に「早く大人になりたいか、それともいつまでも中高生でいたいか」ということを聞いた(表31)。「早く大人になりたい」と答えたのが40.4%、「いつまでも中高生でいたい」と答えたのが36.3%で、さすがに「早く大人になりたい」よりは少なかったが、かなり高い割合である。上記のように「頂点になった気分」であれば、当然の結果かもしれない。これを男子生徒と比較することができたら興味深いだろう。

考察

本調査では、少女たち自身の制服に対する思い入れと、制服が大人の男性にどう受け止められているかについての彼女たちの認識、の両面を探った。80年代後半、第二次ベビーブーム世代(1971~74年生まれ)が高校に入り始めたあたりから、私立女子校が生徒獲得のために、制服のリニューアルを開始し、タータンチェックのミニスカートに白ブラウス、ベストの組み合わせの制服が急増した。1985年に登場した『東京女子高制服図鑑』なる本も、制服のモデルチェンジのサイクルが非常に短いため、ほぼ毎年内容を刷新して発行されていた。⁵ そうしたなか、高校生活の中で制服が持つ意味合いが次第に大きくなり、ルーズソックスやラルフ・ローレンのセーターなど、高校生独自の制服ファッションも発生してきたわけだ。彼女たちにとって、スカートの短さも、ルーズなソックスも決して「オジサン」の目を引くためのものではなく、ピア・グループ(高校生同士の集団)へのアイデンティフィケーションや、コミュニケーションの手がかりとして機能しており、しかもそれが高校時代の3年間しか身につけることができない、ということが一種の希少価値となって、彼らの思い入れを強めているのである。

しかし、そうした彼女たちの思いとは無関係に、制服を着た少女たちをまるで「商品」のように扱う人々がいる。数多くの少女たちが、制服を着ているときに、年長男性(しかもしばしば自分の父親と同世代の男性)に声をかけられ、しかも「1万円」「3万円」と値踏みまでされているのである。彼女たちは別に夜遊びをしていたわけではない。声をかけられるのも新宿や渋谷といった繁華街ばかりではなく、町田のような郊外都市や地元の住宅街であつたりする。これまでいわれてきたように、テレクラや伝言ダイヤルなどの新しいメディアを利用している子だけが、「援助交際」の可能性を持っているのではない。ただ制服を着て街を歩いているだけで、十分に「援交」

を求める年長男性のターゲットになり得るのである。繰り返し声をかけられた少女は次第に警戒心を薄れさせ、相手をみくびるようになってきたり、少しくらいならつきあってもいいかもしれないと思うようになってきたりする。思春期女子の性行動の変化を論じる際には、まず、こうした社会環境の変容を把握しておかなくてはならない。

「援助交際」という言葉の曖昧さにも問題があるように思われる。少女たちの多くは、「最近のオヤジは女子高生といったら皆ウリ（売春）をやると思っている」と憤る一方で、性行為を伴わない「援助交際」については、「危ないと思うけど、うらやましい」という意識も持っている。しかも、相手が中年男性であれば「きっと家族に相手にされなくて淋しいのだろう」から、お金をくれるならカラオケくらい付き合ってもいいだろう、と誤ってしまったり、相手が比較的若めのオジサンなら、お金の絡まない、いずれ恋愛に発展するような「普通のナンパ」かもしれない、という期待を持ってしまったりする。実際にそういう相手に出会うことが絶対にはないわけではないだろうが、少女の側のそうした曖昧な期待は、「援助交際＝性行為」と思い込んでいる相手によってしばしば裏切られるのであり、場合によっては少女たちを本当の危険に晒すことにもつながるのである。

もちろん4人に3人の中高生が声をかけられたからといって、4人に3人の年長男性がそういうことをしているわけではなく、おそらく少数の男性がうまく相手がひっかかるまで、1人で何人も少女に繰り返し声をかけているのであろう。そして、少女たちの大半はそうした年長男性の誘いを今後も「無視する」「断る」と答えている。しかし、街を歩くだけで男性によって値踏みされるような体験が、思春期の少女たちのセルフ・エスティーム（自尊心）にどのような影響を与えるか、ということは今後さらに検討を重ねる必要があるだろう。都市空間におけるポルノグラフィの氾濫が、性差別やセクシャル・ハラスメントの文脈で批判されるようになって久しいが、そういった間接的なハラスメントだけでなく、生身の人間から直接に「お前を買いたい」「お前はいくらだ」というメッセージを受け取ることが、女性（特に成長期の女性に）にとってどういう意味を持つのか、私達はもっと考えていかなければならないのではなかろうか。

< 第二部 > 大人向け雑誌における「女子高生」関連記事分析

研究方法

ここで提示される雑誌の資料は、大宅壮一文庫の雑誌記事検索サービスを利用して収集したものである。その際、件名として「女子高生」「少女売春」「10代の性」という主題のものを検索し、時期の設定を90年から96年までとした。この時期の設定に関しては、昨年度の研究報告並びに質問紙調査の結果を参考にした。³つまり、この90年から96年までの時期は、「第二次女子高生ブーム」とでも呼び得る時期をカバーし、なおかつ質問紙調査の際にも被調査者が認識していた「女子高生ブーム」の時期を包含しているからである。

この入手した資料の記事を分析するにあたって、共通に分析する項目を以下のように設定した。第一に、記名記事に関する項目、具体的には、記名記事の確認、その筆者の性別を調べること、そして内容その他の面で特筆すべき筆者に関して分析するという項目を設定した。第二に、女子高生をめぐる語彙に関する項目、「テレクラ」「ポケベル」「ブルセラ」「援助交際」「コギャル」「マゴ（孫）ギャル」「制服（セーラー服）」などの言葉が、タイトルおよびリードに出現した頻度などを調べた。第三に、それらの記事の質、すなわち女子高生を特集した記事や連載記事の確認や、特に記事の中で写真がどのような位置を占めているのかについて調べることとした。

研究結果

1. 全体的な記事数の変化

私たちが入手した記事を掲載している雑誌は、計66誌であり、その雑誌名を以下に示しておきたい。冒頭にあるジャンル名は、私たちが分析上便宜的に名づけたものである。

写真週刊誌：『FOCUS』『FRIDAY(臨時増刊含む)』『FLASH(臨時増刊含む)』
 中年男性向け週刊誌：『アサヒ芸能』『週刊現代』『週刊時事』『週刊大衆』『週刊テーマス』
 『週刊宝石』『週刊ポスト』
 若年男性向け週刊誌：『週刊プレイボーイ』『宝島』『GORO』『月刊プレイボーイ』『スコラ』
 情報誌：『ACROSS』『SAPIO』『DIME』『ターザン』『Bart』『ビジネス・インテリジェンス』『Views』『プレジデント』『マルコポーロ』
 新聞社および大手出版社刊行の週刊誌：『AERA』『サンデー毎日』『週刊朝日』『週刊読売』『SPA!』『週刊新潮』『週刊文春』『週刊明星』『ニューズウィーク日本版』
 読み物雑誌：『潮』『噂の真相』『月刊Asahi』『現代』『自由時間』『諸君』『新潮45』『太陽』『宝島30』『知識』『調査情報』『創』『東京人』『Number』『日経イメージ』
 気象観測』『鳩よ』『文芸春秋』『へるめす』『宝石』
 女性誌：『CREA』『クロワッサン』『週刊女性』『JUNON』『主婦と生活』『主婦の友』『女性自身』『女性セブン』『non no』『微笑』『婦人公論』
 男性ファッション誌：『checkmate』『DENIM』『メンズノンノ』

今回の報告は、以上の雑誌における全体的傾向の分析を中心として、適宜具体例を言及することとし、ジャンルによる傾向を含めた分析は稿を改めて行いたい。これらの雑誌の記事件数の変化は、順に90年23件、91年29件、92年17件、93年135件、94年185件、95年86件、96年193件であった(表32を参照)。

この件数の変化で特徴的なのは、93年、94年と96年の突出した数である。93年の件数の増加は、おそらく93年8月から9月にかけて、続々と女子高生が巻き込まれた性犯罪の摘発(特に、「ブルセラの帝王」なる人物の逮捕、有名ブルセラショップ「ロペ」等の摘発)が、源になっていると思われる。ちなみにこの「ブルセラの帝王」なる人物は、女子高生をナンパした後、そのナンパした女子高生との性行為をビデオに撮るといふ、いわゆる「ハメ撮り」を繰り返していた男性である。また94年は前年に引き続いた、いわゆる「ブルセラブーム」の影響が見えてくる。96年は、7月にテレビ朝日の『朝まで生テレビ』において「女子高生とニッポン」という番組が組まれた年でもあり、大宅壮一文庫のカテゴリーに加えられるほど「援助交際」という言葉が社会的に認知された年である。

2. 記名記事について

記名記事の件数は、全体のほぼ36%を占めている。その中でも、やはり全体の記事件数の変化と比例してか、93年と94年、そして96年に集中している(全体で243件、93年56件、94年73件、96年65件)。記名記事の書き手の数は、男性が79人であり、女性は52人である。しかし、この書き手たちが書いている件数となると男性の方が圧倒的に多くなっている(男性163件、女性68件、男女混合12件)。もちろんこの件数に関しては、同一の書き手による連載記事も含まれているのであるが、情報発信の場におけるジェンダー格差が反映され、その格差によって「女子高生」を主題にする記事が、結局男性からの視点によって書かれているということが言えるであろう。

具体的な書き手について見てみよう(表33を参照)。女性の書き手で多かったのは、速水由紀子、家田荘子、西川その子などであり、男性の書き手で多かったのは、藤井良樹、白木雅彦、中森明夫などである。この内白木は、『DIME』において23週間もの連載を展開しているが、その内容はマーケティング的なもの、つまり女子高生の間での流行を紹介するものであり、他の頻出する書き手とは別物と考えた方がよい。また中森明夫については、『SPA!』連載の「中森明夫新聞」において他の書き手に発言の場を与えているという意味合いが強い。予想したほど、宮台真司は記事を書いてはいない。彼が書いた記事件数は、全て合わせても10件(内、対談などが5件)である。社会学者である宮台真司は、『制服少女たちの選択』などの著書をものし、また93年に『朝日新聞』文化面で「ブルセラ論戦」を展開するなど、女子高生文化のコメンテーターとして早くから登場していたにもかかわらず、雑誌というメディアに彼自身が書いた記事は相対的に少ない。6-7むしろその点では、職業ライターである黒沼克司の記名記事のほうが多い。おそらく私たちが

抱いているイメージ、つまり「ブルセラ＝宮台」というイメージは、雑誌というメディアよりも、テレビ（『朝まで生テレビ』など）によって作られているのかもしれない。また、上記の書き手たちには、彼女／彼らの相互的なネットワークが存在するように思われる（例えば、「中森明夫新聞」という連載記事に登場する書き手たちなど）。ただし今回の分析では紙幅の都合上、その確認までは踏み込まない。

3. 女子高生をめぐる語彙

女子高生をめぐる語彙として以下では、「テレクラ」「ポケベル」「ブルセラ」「援助交際」「コギャル」「マゴ（孫）ギャル」「制服（セーラー服）」のタイトルとリードに出現した頻度を調べた（表34を参照のこと）。（以下でタイトルとは、その記事の開始ページで独立して書かれているものが中心であり、リードとは、タイトルよりも小さい字体ではあるが、ゴシック体などを使って記事の最初に書かれている5、6行の段落のことを指す）

制服（セーラー服）

「制服」あるいは「セーラー服」という言葉は、90年からタイトルの中に記されている。ただしその件数は少ない。90年代当初は女子高生の水着写真とともに「脱ぐもの」として記事タイトルに登場したりするが、次第に「ブルセラ」という言葉とともに使われるようになる。後述するように、「制服」という言葉は、「ブルセラ」に取って代わられる傾向にある。

テレクラ

「テレクラ」という言葉は、7年間でも25件と意外に少なかった。初出は、91年1月であるが、頻繁に使用されるようになるのは、93年になってからである。リードの部分に書かれていたものを含めても、34件である。これとともに、「デートクラブ」「ツーショットクラブ」などの風俗営業に関する言葉も流通している。これは、雑誌の記事になる場合、「テレクラ」よりも「デートクラブ」に関連した事件（93年から94年にかけて「女子高生デートクラブ」が続々摘発された）が多かったことも関係しているようだ。またこのキーワードを含んだタイトルの記事には、女子高生のテレクラ利用経験率の調査を引くものが多かった。

ポケベル

女子高生がよく使用していると言われるパーソナルメディアの一つ、「ポケベル」という言葉も意外に少なかった。この言葉の初出は93年であり、タイトルに含まれている数は7年間でも13件、リードに含まれていたものを合わせても18件である。その他「携帯電話」「PHS」などの女子高生がよく使っていると言われるパーソナルメディアについても、タイトルにおいて使用されているものはそれほど多くはない。

ブルセラ

「ブルセラ」という言葉は、116件のタイトルで使用されていた。おそらく記事の文中に92年頃からあったと思われるが、タイトルに出現したのは93年であり、そのほとんどが93年、94年に集中する。この両年で100件を超える件数があり、これが95年には一桁に件数が激減する。ブルセラブームは、94年末から95年初頭に終了したと言っても過言ではないだろう。「ブルセラ」という言葉がもともと、「ブル」はブルマーであり、「セラ」はセーラー服のことであるから、当然のことかもしれないが、この言葉が登場した以降は、「制服」という言葉が少なくなっている。

コギャル

「コギャル」は93年に出現する。全体の記事件数が落ち込む95年でも相対的に数は減少せず、96年に、タイトルのみでも43件で使われている。「コギャル」という言葉の使用が最も多い196年頃に、女子高生一般を指す言葉として定着したと推測される。また一方では、「ブルセラ女子高生」という記述も女子高生一般を指す言葉として使用されているわけだが、上記「ブルセラ」という言葉の使用が減少するとともに、「コギャル」という言葉が使用されるようになったとも考えられ

る。

マゴギャル

「コギャル」という言葉に対応して、それよりも若い女子中学生を指す言葉、「マゴギャル」という言葉は、94年に現れる。しかし「コギャル」ほどその数は増加しない(6 5 2)。もちろん、今回収集したデータの性格上の問題(「女子高生」「少女売春」「10代の性」という検索キーワードで選んでいるということ)かもしれないが、「コギャル」があつてこそその「マゴギャル」という言葉なのではないかと思われる。ちなみに、ある記事では、女子中高生を「いちご」世代と呼んでいる。

援助交際

「援助交際」という言葉は、タイトル、リードにもなかなか出現しない。全体の中でも26件ほどである。この言葉が上記雑誌全誌の中で最初に使われたのは、93年10月6日号の『SPA!』においてであり、言葉としてはこの頃から使用されてはいたはずであるが、タイトルなどで頻繁に使用され始めるのは96年4月以降である。なお、大手新聞社系の雑誌などでは、女子高生の売春については「援助交際」という言葉よりも、直截に「売春」という言葉が使用されていた。

4.連載記事と特集記事

まずここでの連載記事と特集記事の定義を示しておく。連載記事と特集記事はともに「女子高生に関する主題が設定されていること」を前提とし、連載記事は「一定期間の間、号をまたがって連続した記事が提示されているもの」であり、特集記事は「一つの号の中に、ある程度独立した記事がパッケージ化されて掲載されているもの」とであると定義した。

連載記事としてカウントできるものは、全体で10のシリーズがあつた(表35を参照)。女子高生をその内容の中心とする連載記事は、93年に3つ(3回連載が2つと23回連載)、94年に2つ(上下と回数不明)、96年に5つ(それぞれ上下連載、3回、6回、10回、17回)。上記の連載の内、93年の23週間にわたって連載された『DIME』の記事は先述したように、「女子高生デート倶楽部」という題名にもかかわらず、マーケティングあるいは流行を紹介する意味合いが強い。94年以降に登場する連載記事は、例えば94年の「コギャルのマーチ」(『女性自身』)や、96年の10回と17回という大きな連載のタイトルが、それぞれ「セーラー服の内側」「六本木コギャル」(いずれも『週刊大衆』)であるように、すべて女子高生の性の乱れを記したものである。

今回収集したデータの中で特集記事として最も早いものは、『スコラ』の90年4月12日号、「全告白女子高生のSEX根掘り葉掘り」という記事である。この日付を見る限り、これ以前にも女子高生を特集した記事が存在する可能性は否めない。この記事からカウントして特集記事の数は29件であつた。また、95年1月の『創』における「女子高生という記号」という特集では、女子高生やブルセラブームなどのテーマについて、よく文章を書いている書き手(例えば藤井良樹、家田荘子、宮台真司など)が登場している。この特集は、『創』という雑誌自体が「メディア批評」を主題とするがゆえに、他の特集記事とは趣を異にし、分析的な文章が並んでいる。

5.写真を扱う記事の関係

全体的に見るならば、文章を主とした記事が圧倒的に多い。ただし、そういった文章を主とした記事でも必ずと言っていいほど写真は使われている。

写真が主となっている記事は、93年以降に増加する(表35を参照)。それまで一桁台だったものが、93年には18件、94年には33件となる。これには、写真週刊誌(7年間で44件、その内写真が主となっている93年の記事は8件、同じく94年の記事は12件)も含まれているが、それを含めてこの増加はブルセラブームと呼応した、女子高生の「性的商品化」を示しているのではないだろうか。その理由として、そういった写真が主となっている記事の多くは、女子高生のカタログ的なもの(たとえば同一人物が制服を着た写真と水着を着た写真が一緒に示されているもの)であることをここにあげておく。

また、女子高生に関する写真は、その露出度が年々増していることも示しておこう。例えば、『スコラ』においては94年に、制服姿の女子高生とプロフィールを同時に掲載するというそれ以前のスタイルから、ヌードや自慰行為を想起させる過激な写真を用いる記事が増加している。こういった変化は、写真週刊誌でも同様であり、上記したような水着写真であっても、その水着の体を覆う部分が少なくなる（『ギリギリ』などの形容詞とともに）傾向が見られる。

考察

今回の分析は記事のタイトルを中心にした分析に限られるわけだが、女子高生をめぐる語彙を調べてみると、そのそれぞれが互いに相関していることが見て取れる。90年から92年までの記事の中で、今回調べたタイトルに出て来た語彙は、「制服」が7件、「テレクラ」が1件であった。この時期の「制服」という言葉は、「女子高生の象徴」といった意味合いが強い。この頃はまだトレンドセッター、つまり流行を創り出す存在としての女子高生を中心とした記事も見受けられるし、その一方でダイヤルQ2の一種であるツーショットQ2の摘発などの事件記事が掲載され、女子中高生の性体験に関する記事が載せられるなど、様々な記事が混在している状態である。この時期の記事に一貫して言えるのは、女子高生が「性的商品」となる萌芽が見られるものの、その積極性のようなものは殊更に強調されてはいないということである。

ところが、93年と94年の「ブルセラブーム」は、女子高生をめぐる語彙の変化をもたらし、それは恐らく私たちの女子高生へのまなざしの変化をももたらしていると思われる。例えば、「制服（セーラー服）」という言葉の入ったタイトルは、90年にも（恐らくそれ以前も）あったわけだが、93年を境にして「ブルセラ」に取って代わられる。言うならば、制服はそこで、「女子高生の象徴」として、さらに言うなら「脱ぐもの」としての意味を剥奪され、むしろ単なる「性的な商品」として提示されるようになったと思われる。それと呼応するかのようになり、女子高生は、「ブルセラ女子高生」という言葉によって示される場合もあるわけだが、それよりも「コギャル」という言葉によって提示されるようになる。

一方で、今回の分析により、「援助交際」という言葉は、93年当時から使用されてはいるものの、96年に頻繁に使われるようになったということがわかった。ただし、すでに93年の段階で「援助交際＝ウリ」という意味づけはなされており、また「ブルセラ」という言葉とともに、女子高生の「テレクラ」「デートクラブ」の利用、そしてその摘発が記事となっている。つまり「ウリとしての援助交際」が一般的に使われる素地は、すでに93年頃に出来上がっていたと考えられるのである。

ごくごく単純に言うならば、「制服」から「ブルセラ」へ、「ブルセラ」から「援助交際」へという流れがあったということになる。つまり、まず身につけていた「制服」が「ブルセラ」として売買の対象となる。それとほぼ同時に、身体自体を売買の対象とする場所として「テレクラ」あるいは「デートクラブ」があったのだが、それが全国的に摘発されるに及んで、自前の手段をとるようになる。それが「援助交際」という身体の売買であり、その道具として「ポケベル」「PHS」「携帯電話」が使われているという図式だ。

しかしこれは、あくまでもマスメディアにおける情報の流れに過ぎないであろう。確かに、私たちが調べた記事の中には、例えば「座談会」形式のもの、つまり仮名の女子高生を何人が集め、彼女たち「自身」に自分の経験を語らせるという記事もあった。すなわち記事に現実感を持たせ、あたかも記事が現実の忠実な写しであると思わせるものもあった。また前述の写真の使い方も、このことに関連しているかもしれない。

しかし、このような情報の流れは、イメージであり、そのイメージと現実とのズレも生み出していると思われる。特に「援助交際」という言葉に関してはそのことが顕著である。その証拠に、この「援助交際」という言葉は、非常に多義的な意味合いを持っているということが記事タイトルを調べるだけでもわかる。例えば、96年の記事には、「援助交際とは、おじさんとデートして、洋服など欲しい物を買ってもらったり、お金をもらったりすること」（『女性セブン』）といった、「援助交際＝ウリ」という意味合いを揺るがす記事がある。また一方では、96年7月のテレビ朝日『朝まで生テレビ 女子高生とニッポン』放映を受けた、女子高生自身による反対討論会が9月に開催されている。この討論会が設定されたこと自体が、それまでのマスメディアによる過剰

な報道への反発を意味し、それは間接的に「援助交際＝ウリ」という意味合いの否定ともとれる。

いずれにせよ、ここにはマスメディアによる過剰な報道が存在していることは確かである。しかもその流れは前記したように、女子高生を「性的に商品化」するような意味づけ方であったことも確かなのである。この流れが、私たちも含めたマスメディアのオーディエンス、特に男性の女子高生に対するイメージ形成に何らかの影響を与えていると思われる。

今回の分析は概観的なものに過ぎないが、90年代前半、とりわけ93年、94年兩年を中心にして、女子高生をめぐる雑誌記事には、大きな転換が存在していると言えよう。そしてそれは、女子高生を「性的な商品」として受動的な立場から能動的な立場へと移行したかのような、そして現実とは乖離したイメージを持たせるものであったことが、今回の分析で明確になったことである。

今後の課題

今後、雑誌記事のさらなる詳細な量的並びに質的な研究を展開していくことが必要である。以下にその具体的な方向性をいくつか提示しておきたい。

今回の分析は基本的に記事のタイトルをその中心に据えた分析であった。もちろん上記の記述の中でも記事の内容に触れられる部分は触れたが、さらに深く記事それ自体に踏み込んでいくべきであろう。記事それ自体に何が表現されているのか。それに何らかの傾向性などがあるのかどうか。記事タイトルとの関係などについても調べる必要があるだろう。

今回の記事タイトルを調べた上で、記事の形式が記事の読まれ方に与える影響について考察する必要性を感じた。具体的にはルポ型記事、座談会やインタビューなどを中心に、量的な分析並びにエスノグラフィ的分析が挙げられるであろう。またこのことは、雑誌のルポやインタビュー、座談会などでよく登場する出会いのツールや場所と、統計的な調査の結果との付き合い合わせなどによる比較を試みることも価値があると思われる。

また写真の扱われ方についても同様にさらに深く検討するべきである。「ブルセラブーム」が起きて以降、雑誌記事における写真記事に変化があることは確認したが、その割合、量などまでは今回調べるができなかった。女子高生のイメージなどに写真が与える影響は大きなものだろう。この点についても量的な分析と質的な分析を深めていきたい。

結論

第一部の質問紙調査の結果と、第二部の大人向け雑誌の記事分析の結果から、次のようなことがいえる。

- (1) 今日**の思春期女子の性行動の変化は、年長男性の性行動の変化と同期している**（図1を参照）。東京都性教育研究会の調査（3年毎に実施）によると、高校3年男子の性交経験率は1987年から96年に至るまで、22%から28%の間で上下しており、目立った増加は見られない。² 一方、高校3年女子でみると、87年、90年と17～18%台であるが、「ブルセラ」報道で急に大人向け雑誌に「女子高生」関連記事件数が増えた93年に22.3%に微増、そして「援助交際」が雑誌だけでなくテレビをも賑わせた96年には34.0%と、90年の倍の割合にはね上がって、男子を追い抜いてしまう。もちろん、性交経験の増加をすべて「援助交際」によるものとは断定できないが、同年代の男子との性交だけでなく、年長男性との性交が増えたことはおそらく間違いないことである。メディアが作り出した「女子高生」ブームが行動の変化を引き起こしたのか、単にメディアは行動の変化を報道しただけなのか（つまりにわとりが先か、たまごが先か）ということは、容易に結論を出せるものではないが、メディアの過熱報道は男性側と少女側双方の行動の変容に一層の拍車をかける効果があったのではないかとと思われる。
- (2) 異世代（年長男性と若年女子）間の性的交渉の増加の原因を、テレクラ等の新メディアのみに帰することは出来ない。従来、思春期女子の「不純異性交遊」は、同世代間の性交渉を指すことが多く、異世代間の性交渉は特殊な例（たとえばヤクザが絡んだ女子高生売春とか、教師と教え子の恋愛）を除いては一般的なものではなかった。そういう意味では93

年以降の、思春期女子の性行動の活発化は、世代の異なる男女を結ぶ新しいコミュニケーションのチャンネルが出来上がったことを示している。一般に言われるように、テレクラや伝言ダイヤル、あるいはポケベルや携帯といった新しいメディアがそれを可能にした部分も確かにあるだろう。しかし、今回の街頭調査が明らかにしたように、そのようなメディアを使わなくても、年長男性は街中で直接少女たちに誘いの声をかけるようになっている。いわば「援助交際」という言葉が出来たことが、つまり年長男性が未成年少女と交渉を持つことに名前が与えられたこと自体が、新たなコミュニケーション・チャンネルを創出したのではないか。しかも「援助交際」という言葉の意味の不透明性が、世代間の意識のずれを生み、二者間の交渉を少女にとって不利なものにしているように思われる。

- (3) 90年代の女子高生の性的商品化は、3段階のステップを踏んでいる。80年代末に第二次ベビーブーム世代が高校生になり、中高生が大きなマーケットとして注目を集めたが、90年代初頭の雑誌記事にはその名残が見られ、まだ性的な商品として扱う傾向は弱い。93年のブルセラ報道から急激に「女子高生」関連記事が増加し、内容も性的になるが、その時点ではまだ「制服」そのもののフェティシズムがあった。これが第3段階に入ると関心は「制服」そのものではなく、中身の少女たち自身に移っていく。「援助交際」という言葉自体は93年頃から使われているのだが、96年に爆発的に一般メディアに広まった。「トレンドセッター」「ブルセラ女子高生」「援助交際コギャル」と、いずれのステップにおいても、基本的に少女たちの「主体性」、能動性に焦点が当てられてきた。「純真無垢」で不可侵なもの、さらに性に対して受け身な存在としての「少女」のイメージは崩壊し、むしろ積極的に自己主張する存在として描かれるようになったことにより、年長の男性が未成熟な少女に触れることに対して、かつてあったようなタブー意識が薄れてきたと言えるだろう。

文献

- 1 日本性教育協会「青少年の性に関する調査」1987、1993
- 2 東京都性教育研究会「中・高生の性意識・性行動に関する調査」1987、1990、1993、1996
- 3 村松泰子、佐藤（佐久間）りか、斎藤文栄、平野亜矢「少女雑誌の性情報と若年期のリプロダクティブ・ヘルス」（私家版報告書）1998
- 4 大治朋子「短期集中連載・5 欲望する少女」『サンデー毎日』1997年10月12日号
- 5 森伸之『東京女子高制服図鑑』（弓立社）1985、『同・昭和62年度版』1986、『同・昭和63-64年度版』1988、『同・'89-'90年度版』1989、『同・'91年度版』1991、『同・'92年度版』1992、『同・'93年度版』1993、『同・'94年度版』1993（ちなみにブルセラが問題化した93年末に発行された94年度版を最後に新版は発行されていない）
- 6 宮台真司『制服少女たちの選択』（講談社）1994
- 7 宮台真司「ブルセラショップの女子高生 本当の危険を見極める冷静さ必要」『朝日新聞』93年9月9日夕刊

(表1) 調査対象の学年(調査地別)

	新宿	町田	合計
中学1年	0 (0.0%)	2 (3.5)	2 (1.7)
中学2年	2 (3.1)	2 (3.5)	4 (3.3)
中学3年	10 (15.6)	2 (3.5)	12 (9.9)
高校1年	12 (18.8)	22 (38.6)	34 (28.1)
高校2年	20 (31.25)	15 (26.3)	35 (28.9)
高校3年	20 (31.25)	14 (24.6)	34 (28.1)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表2) 通っている学校の種類

	新宿	町田	合計
公立共学校	8 (12.5%)	25 (43.8)	33 (27.3)
公立女学校	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
私立共学校	22 (34.4)	14 (24.6)	36 (29.8)
私立女子校	34 (53.1)	18 (31.6)	52 (42.9)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表3) 調査対象の居住地および調査地が通学路であるかどうか

	新宿	町田	合計
東京23区	28 (43.7%)	3 (5.3)	31 (25.6)
東京都下	18 (28.1)	22 (38.6)	40 (33.0)
神奈川	4 (6.3)	32 (56.1)	36 (29.8)
千葉	7 (10.9)	0 (0.0)	7 (5.8)
その他	6 (9.4)	0 (0.0)	6 (5.0)
無回答	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (0.8)
調査地が通学路である	35 (54.7)	38 (66.7)	73 (60.3)
調査地が通学路でない	29 (45.3)	19 (33.3)	48 (39.7)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表4) 「あなたが今着ているのはあなたの学校の制服(標準服)ですか？」

	新宿	町田	合計
はい	54 (84.4%)	49 (86.0)	103 (85.1)
いいえ	10 (15.6)	8 (14.0)	18 (14.9)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表5) 「通学や学校関連行事以外のときにもその制服(あるいは制服風の服)を着ていますか？」

	新宿	町田	合計
はい	18 (28.1%)	19 (33.3)	37 (30.6)
いいえ	45 (70.3)	36 (63.2)	81 (66.9)
無回答	1 (1.6)	2 (3.5)	3 (2.5)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表6) 「高校を卒業して制服を着なくなったらどう感じると感じますか？」

	新宿	町田	合計
嬉しい	7 (10.9%)	3 (5.3)	10 (8.3)
淋しい	40 (62.5)	34 (59.6)	74 (61.1)
別に何とも思わない	9 (14.1)	12 (21.1)	21 (17.4)
その他	6 (9.4)	6 (10.5)	12 (9.9)
無回答	2 (3.1)	2 (3.5)	4 (3.3)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表7)「制服を着ているときと着ていないときとで、男性の視線に違いを感じますか？」

	新宿	町田	合計
感じる	42 (65.6%)	29 (50.9)	71 (58.7)
感じない	21 (32.8)	28 (49.1)	49 (40.5)
無回答	1 (1.6)	0 (0.0)	1 (0.8)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表8)「街で『若めのオジサン』(25歳以上で自分の父親よりは若いと思われる男性)に声をかけられた(ナンパされた)経験はありますか？」

	新宿	町田	合計
たびたびある	23 (35.9%)	11 (19.3)	34 (28.1)
1~2度ある	22 (34.4)	27 (47.4)	49 (40.5)
ない	19 (29.7)	19 (33.3)	38 (31.4)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表9)「街で『中年のオジサン』(自分の父親と同じくらいかそれ以上の年齢だと思われる男性)に声をかけられた(ナンパされた)経験はありますか？」

	新宿	町田	合計
たびたびある	20 (31.3%)	12 (21.1)	32 (26.4)
1~2度ある	13 (20.3)	12 (21.1)	25 (20.7)
ない	31 (48.4)	33 (57.8)	64 (52.9)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表10)街でオジサン(25歳以上の男性)に一度でも声をかけられたことがある割合

	新宿	町田	合計
ある	48 (75.0%)	43 (75.4)	91 (75.2)
ない	16 (25.0)	14 (24.6)	30 (24.8)
合計	64 (100.0)	57 (100.0)	121 (100.0)

(表11)「初めて声をかけられたのは何年生のときでしたか？」(以下、新宿・町田合計)

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
小学生時代	5 (6.0%)	4 (7.0%)
中学1年	4 (4.8)	2 (3.5)
中学2年	12 (14.5)	9 (15.8)
中学3年	22 (26.5)	10 (17.5)
高校1年	28 (33.8)	19 (33.4)
高校2年	10 (12.0)	8 (14.0)
高校3年	0 (0.0)	1 (1.8)
無回答	2 (2.4)	4 (7.0)
合計	83 (100.0)	57 (100.0)

(表12)「何とって声をかけられましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 83)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 56)
ただ声をかけられただけ	20 (24.1%)	10 (17.9%)
お茶に誘われた	17 (20.5)	9 (16.1)
食事に誘われた	3 (3.6)	6 (10.7)
カラオケに誘われた	27 (32.5)	22 (39.3)
ホテルに誘われた	2 (2.4)	4 (7.1)
ドライブに誘われた	7 (8.4)	5 (8.9)
それ以外のことを求められた	35 (42.2)	19 (33.9)

(表 13 - 1)「『お金をあげるから』あるいは『何か買ってあげるから』と言われたことはありますか？」

	相手が若めのオジサン	相手が中年のオジサン	若め・中年含めたオジサン全体*
はい	38 (46.3%)	36 (66.7%)	53 (58.2%)
いいえ	44 (53.7)	18 (33.3)	38 (41.8)
合計	82 (100.0)	54 (100.0)	91 (100.0)

*25 歳以上の男性に声をかけられたことがある回答者のうち、一度でも金品供与の申し出を受けたことのある者

(表 13 - 2)「はい」と答えた方は「具体的に何といわれましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 34)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 35)
具体的な金額提示なし	15 (44.1%)	13 (37.1%)
10 万円以上あげる	0 (0.0)	0 (0.0)
5 万円以上 10 万円未満	4 (11.8)	3 (8.6)
1 万円以上 5 万円未満	11 (32.4)	13 (37.1)
1 万円未満	1 (2.9)	0 (0.0)
具体的な品名は挙げずに「何か買ってあげる」	6 (17.6)	1 (2.9)
具体的に「 <input type="text"/> を買ってあげる」	4 (11.8)	5 (14.3)

(表 14)「声をかけられたとき、あなたは 1 人でしたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 51)
1 人だった	56 (68.3%)	32 (62.7%)
2 人だった	34 (41.5)	20 (39.2)
3 人以上だった	3 (3.7)	4 (7.8)

(表 15)「声をかけられたとき、相手は 1 人でしたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 80)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 51)
1 人だった	71 (88.8%)	53 (94.6%)
2 人だった	13 (16.3)	3 (5.4)
3 人以上だった	0 (0.0)	2 (3.6)

(表 16)「これまでに声をかけられたとき、あなたはどんな服装をしていましたか？」

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 80)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 51)
制服 (制服風の服) だった	40 (48.8%)	31 (55.4%)
私服だった	17 (20.7)	14 (25.0)
制服のときも私服のときもあった	25 (30.5)	11 (19.6)
合計	82 (100.0)	56 (100.0)

(表 17)「それは何時くらいの時間帯でしたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 55)
朝 (登校時間の頃)	2 (2.4%)	1 (1.8%)
午前中	4 (4.9)	2 (3.9)
午後 5 時前	25 (30.5)	17 (30.9)
午後 5 ~ 9 時	52 (63.4)	31 (56.4)
午後 9 時 ~ 深夜 0 時	16 (19.5)	13 (23.6)
深夜 0 時以降	3 (3.7)	1 (1.8)

(表18)「初めて声をかけられたとき、どう思いましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 56)
面白かった	4 (4.9%)	0 (0.0%)
腹が立った	13 (15.9)	10 (17.9)
気持ち悪かった	52 (63.4)	40 (71.4)
こわかった	29 (35.4)	13 (23.2)
嬉しかった	3 (3.7)	0 (0.0)
危ないと思った	16 (19.5)	8 (14.3)
得した、ラッキーと思った	2 (2.4)	0 (0.0)
侮辱されたと思った	2 (2.4)	0 (0.0)
自尊心をくすぐられた	0 (0.0)	0 (0.0)
楽しかった	0 (0.0)	0 (0.0)
何とも思わなかった	6 (7.3)	3 (5.4)
その他	18 (22.0)	11 (19.6)

(表19)「そのオジサンのことをどう思いましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 55)
感じがいい	3 (3.7%)	0 (0.0%)
いやらしい	26 (31.7)	19 (34.5)
かわいそう	1 (1.2)	1 (1.8)
バカみたい	40 (48.8)	22 (40.0)
特になし	4 (4.9)	4 (7.3)
その他	25 (30.5)	17 (30.9)

(表20)「それであなたはどうしましたか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 56)
黙って無視した	35 (42.7%)	29 (51.8%)
話を聞かずにすぐに断った	22 (26.8)	13 (23.2)
その場で話を聞いた上で断った	16 (19.5)	12 (21.4)
納得できる範囲でつきあってあげた	2 (2.4)	1 (1.8)
その他	13 (15.9)	6 (10.7)

(表21)「今同じように声をかけられたら、あなたはどのように感じると思いますか？」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 56)
面白い	2 (2.4%)	0 (0.0%)
腹が立つ	18 (22.0)	17 (30.4)
気持ち悪い	38 (46.3)	20 (35.7)
こわい	10 (12.2)	7 (12.5)
嬉しい	2 (2.4)	0 (0.0)
危ないと思う	8 (9.8)	5 (8.9)
得した、ラッキーと思う	1 (1.2)	0 (0.0)
侮辱されたと思う	1 (1.2)	1 (1.8)
自尊心をくすぐられる	0 (0.0)	0 (0.0)
楽しい	1 (1.2)	0 (0.0)
何とも思わない	16 (19.5)	7 (12.5)
その他	11 (13.4)	12 (21.4)

(表 22)「今同じように声をかけられたら、あなたはどのように思いますか?」(複数回答)

	相手が若めのオジサンの場合 (n = 82)	相手が中年のオジサンの場合 (n = 56)
黙って無視する	44 (53.7%)	34 (60.7%)
話を聞かずにすぐに断る	26 (31.7)	22 (39.3)
その場で話を聞いた上で断る	10 (12.2)	1 (1.8)
納得できる範囲でつきあってあげる	2 (2.4)	0 (0.0)
その他	8 (9.8)	4 (7.1)

(表 23)「これまでに『無視した』『断った』『つきあってあげた』ために怖い目にあったことはありますか?」

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
はい	21 (25.3%)	13 (22.8%)
いいえ	58 (69.9)	40 (70.2)
無回答	4 (4.8)	4 (7.0)
合計	83 (100.0)	57 (100.0)

(表 24)「オジサンに声をかけられたことを親に話しましたか?」

	相手が若めのオジサンの場合	相手が中年のオジサンの場合
両親に話した	10 (12.0%)	6 (10.5%)
母親にだけ話した	20 (24.1)	11 (19.3)
父親にだけ話した	2 (2.4)	0 (0.0)
どちらにも話さない	48 (57.8)	38 (66.7)
無回答	3 (3.6)	2 (3.5)
合計	83 (100.0)	57 (100.0)

(表 25)「あなたの友達の中に 25 歳以上のオジサン(若め・中年含め)から声をかけられた(ナンパされた)経験がある人は何人くらいいますか?」

	本人が声をかけられたことがある	本人が一度も声をかけられたことがない	合計
3人以上いる	64 (70.3%)	8 (26.7)	72 (59.5)
1~2人いる	14 (15.4)	14 (46.6)	28 (23.1)
1人もいない	11 (12.1)	8 (26.7)	19 (15.7)
無回答	2 (2.2)	0 (0.0)	2 (1.7)
合計	91 (100.0)	30 (100.0)	121 (100.0)

(表 26 - 1)「街中や電車の中などで痴漢に遭ったことはありますか?」

たびたびある	1~2度ある	ない	無回答	合計
55 (45.5%)	40 (33.1)	25 (20.7)	1 (0.8)	121 (100.0)

(表 26 - 2)「ある」と答えた方は「制服のときと私服のときでどちら痴漢に遭いやすいと思いますか?」

制服の方が遭いやすい	79 (83.2%)
私服の方が遭いやすい	7 (7.4)
どちらとも言えない	7 (7.4)
無回答	2 (2.1)
合計	95 (100.0)

(表 27)「マスコミで報道される『女子中高生』のイメージについて、あなたはどのように思いますか？」

実際そのような人が多いと思う	18 (14.9%)
一部にはそういう人もいるが、そうでない人の方が多いと思う	95 (78.5)
そのような人はほとんどいないと思う	6 (5.0)
その他	2 (1.7)
無回答	1 (0.8)
合計	121 (100.0)

(表 28)「以下のことを援助交際だと思いませんか？」(上段が中高生、下段斜体は母親世代)
「ずっと年上の男性と」

	セックスやそれに近い行為をすること	お茶や食事・カラオケなどにつきあうこと
お金をもらって	120 (99.2%) (n = 121) 26 (96.3) (n=27)	99 (81.8%) (n = 121) 27 (100.0) (n=27)
服やバッグを買って もらって	118 (97.5) (n = 121) 26 (96.3) (n=27)	96 (80.0) (n=120) 26 (96.3) (n=27)
お金はもらわないで	38 (31.4) (n = 121) 15 (55.6) (n=27)	27 (22.3) (n = 121) 14 (51.9) (n=27)

「年のあまり離れていない男性と」

	セックスやそれに近い行為をすること	お茶や食事・カラオケなどにつきあうこと
お金をもらって	108 (89.3%) (n = 121) 25 (92.6) (n=27)	87 (72.5%) (n=120) 24 (88.9) (n=27)
服やバッグを買って もらって	96 (80.0) (n=120) 24 (88.9) (n=27)	70 (59.3) (n=118) 23 (85.2) (n=27)
お金はもらわないで	22 (18.3) (n=120) 13 (48.1) (n=27)	9 (7.5) (n=120) 11 (40.7) (n=27)

(表 29)「『女子高生ブーム』は今も続いていると思いませんか？」

いまも続いている	43 (35.5%)
もう下火だと思う	62 (51.3)
終わっている	11 (9.1)
わからない	5 (4.1)
合計	121 (100.0)

(表 30)「『女子高生ブーム』はあなたにとっては良いことですか？悪い(嫌な)ことですか？」

良いことだと思う	23 (19.0%)
悪いことだと思う	28 (23.1)
どちらでもない	65 (53.8)
わからない	1 (0.8)
その他(良くも悪くもある)	4 (3.3)
合計	121 (100.0)

(表 31)「あなたは早く大人になりたいですか？それともいつまでも中高生でいたいと思いませんか？」

早く大人になりたい	49 (40.4%)
いつまでも中学生でいたい	5 (4.1)
いつまでも高校生でいたい	39 (32.2)
もっと小さいときに戻りたい	8 (6.6)
その他	19 (15.7)
合計	121 (100.0)

(表 32) 全体記事数推移 (90～96年)

	90	91	92	93	94	95	96	合計
記事数	23	29	17	135	185	86	193	668

(表 33) 主な書き手の記事数

	速水由紀子	家田荘子	西川その子	藤井良樹	白木雅彦	中森明夫	宮台真司	黒沼克史
	8	6	5	33	23	14	10	9

(表 34) 「女子高生」をめぐる語彙のタイトル及びリードにおける頻度の年次推移

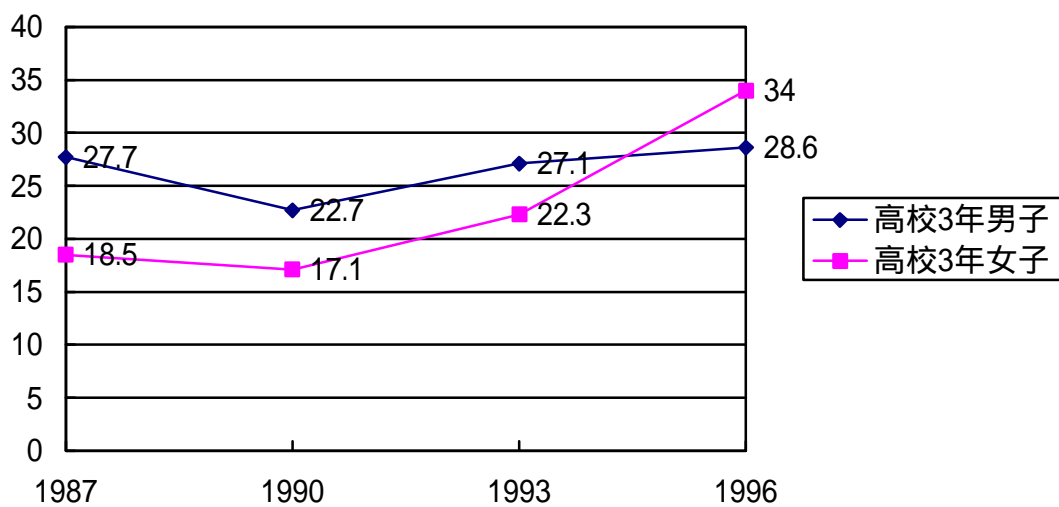
	制服	テレクラ	ポケベル	ブルセラ	コギャル	マゴギャル	援助交際
90	2	0	0	0	0	0	0
91	3 (1)	1 (1)	0	0	0	0	0
92	2 (1)	0	0	0	0	0	0
93	15	6 (1)	5 (1)	59 (3)	2	0	1
94	4 (1)	10 (1)	2	41 (3)	21 (2)	6	0
95	3	5 (2)	3 (1)	17 (5)	16 (2)	7 (2)	2 (1)
96	22	12 (4)	8 (3)	10	37 (4)	2	21 (5)

括弧内の数字はリードに含まれていた数

(表 35) 連載記事、特集記事、写真を主とする記事の年次推移

	連載	特集	写真
90	0	3	6
91	0	0	3
92	0	0	1
93	3	1	22
94	2	13	37
95	0	4	18
96	5	8	31

図1 性交経験者の推移（高校3年生のみ）
（%）



ABSTRACT

Sexual Commercialization of “Joshikosei (High-School Girls)” in Adult Magazines and Its Relationships with the Changing Sexual Behaviors of Adolescent Girls

Yasuko Muramatsu, Rika Sakuma Sato, Shin Tomabechi, Aya Hirano, Takayuki Okai

The aim of this study is to shed some light upon the changes in the pattern of social interactions between adult men and adolescent girls in contemporary Japan. In recent years, the so-called enjo-kosai (compensated dating) between adolescent girls and adult men has become one of the serious social problems. Enjo-kosai includes a wide range of relationships, from having an innocent chat over a cup of tea, to letting the man touch the body, to actually having sex with him, but the bottom line is that it always involves compensation by money or other valuables.

While many of the past studies focused on the behaviors of girls themselves, we decided to focus instead on the behaviors of men towards young girls. For this purpose, we chose to do two things. One is to conduct a survey on the streets of Tokyo asking teenage girls in school uniforms whether they have ever received a solicitation from adult men to engage in enjo-kosai. The other is to survey the articles in the magazines targeting adult audience, and see how the treatment of adolescent girls, particularly “joshikosei (high-school girls),” changed over the years between 1990 and 1996.

First of all, the result of the street survey shows that 75.2 percent of the respondents (whose average age was 16.34) had been solicited at least once by men who appeared to be older than 25-years-old. 47.1 percent had been solicited by men who were apparently as old as or older than their own father. 58.2 percent of the girls who had been solicited were offered compensation of money or goods. They were more likely to be solicited when they were wearing school uniforms than when they were in their private clothes. Although the link between enjo-kosai and the use of telephone services such as “telephone clubs” and “message dials” has been emphasized in the past, the current survey shows that a considerable proportion of schoolgirls today receive solicitation from men by just walking on the streets.

Secondly, the analysis of the magazine articles shows that the sexual commercialization of schoolgirls in the media during the 1990s proceeded in three stages. From 1990 to 1992, “joshikosei (high-school girls)” were often depicted as trend-setting consumers, and their sexualization was not so prevalent. But in 1993, the existence of burusera shops (shops which sold schoolgirls’ used uniforms and underwear to fetishist customers) came to attract media attention and the number of articles dealing with schoolgirls soared from 17 in 1992 to 135 in 1993. The number of articles fell in 1995 but it rose once again in 1996 to count 193. In this third stage, the word enjo-kosai came to be used mostly as a euphemism for “schoolgirl prostitution” in adult magazines, in spite of the fact that the word originally included non-sexual dating (with monetary compensation) in its definitions.

Although we do not have longitudinal data on the adult men’s behavior towards girls, there seems to be some correlation between the spread of the term enjo-kosai in the media after 1996 and the prevalence of on-street solicitation of teenage girls by adult men today. But we need more careful analysis of magazine articles before drawing any conclusions on the causal relationship between the two phenomena. It is also an important task for future researchers to investigate the impact of the constant “pricing” by strangers (as a kind of street harassment) on the self-esteem of adolescent girls.